

樟蔭女子専門学校国文科「国語」試験問題の翻刻と紹介(2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白川, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4694

樟蔭女子専門学校国文科「国語」試験問題の翻刻と紹介(2)

白川哲郎

はじめに

本稿は、樟蔭女子専門学校（以下、「樟蔭女専」と記す）『検定ニ関スル試験問題集』の中から、国文科（昭和二三（一九四七）年三月以後の卒業生については文科国語科⁽¹⁾）で実施された、昭和二〇（一九四五）年度から昭和二三（一九四八）年度の中等教員免許「国語」および「国民科国語」⁽²⁾（昭和二三三月以後の卒業生に該当）に関わる試験問題を翻刻、紹介するものである。

筆者はこれまでに、昭和三（一九二八）年度から昭和二〇年度までの樟蔭女専における「国語」試験問題の概略について考察するとともに⁽³⁾、国文学科開講科目「歴史文化総合研究A」における成果を報告する形で、昭和三年度から昭和二三（一九三八）年度の間の「国語」「文学史」の試験問題の内容について、受講生とともに翻刻、紹介した（以下、「前稿」と記す⁽⁴⁾）。本稿では、前稿に引き続いて、第二次世界大戦敗戦後しばらくの時期における中等教員「国語」

「国民科国語」免許関連（以下、科目としては「国語」と一括して記す）の試験問題を翻刻、紹介する。

今回、翻刻・紹介の対象とする時期は、敗戦にともなう戦後教育改革の一環として、高等教育制度にも大きな変更が加えられ、いわゆる新制大学が誕生するまでの期間に該当する⁽⁵⁾。この敗戦後の教育制度の大きな転換期にあつて、樟蔭女専ではどのような国語教育が実施されていたのかについて、試験問題を通して考えてみたい。

一、試験問題の翻刻

樟蔭女専国文科・文科国語科で昭和二〇年度から昭和三三年度に実施された、中等教員「国語」免許に関わる試験問題を翻刻、整理したものが、別掲の表「樟蔭女子専門学校国文科「国語」検定試験問題（昭和二〇（一九四五）年度～昭和二三（一九四八）年度）」（以下、「表」と記す）である。

前稿では、翻刻・紹介する科目を「国語」と「文学史」に限定したが、本稿では、中等教員「国語」免許に関わる科目全般の試験問題を取り上げる。また既述のように、昭和二〇年度以前の「国語」免許関係試験問題については、かつてその概略をおおよそ示したが、昭和二一年度以降については、それを全く果たすことができていない。そこで、「文学概論」や「国語学」といった「国語」免許に直接関係する科目の他に、倫理学・歴史学など関連する科目の試験問題についても今回合わせて表に載せた。

また、前稿ではその重要性について認識しながら取り上げることができなかった「漢文」についても、出題対象となっている作品（文章）のレベルから今回は取り上げている。それは、昭和二〇年度までは「国語」免許と「漢文」免許という異なる学科目として中等教員免許が別個に認められていたものが、昭和二一（一九四六）年度からは、両科目が「国民科国語」という科目・免許に統合されたことにもよる。もちろん、この科目・免許統合以前においても、「国語」免許に占める「漢文」の重要性については、あえて強調するまでもない。昭和一九（一九四四）年度以前の「漢文」試験問題の出題対象となっている作品（文章）についても、今後、紹介して行きたい。

二、昭和二一〜二三年度「国語」試験問題についての若干の考察

翻刻・紹介した「国語」試験問題について、その注目点を簡単に見て行こう。なお、昭和二〇年度の問題は、実施時期も含めて不明な点が多く評価が難しい。したがって不本意ながら、いったんここでは考察の対象から除外する。

最初に、「国語」試験問題の出題傾向について見ると、作品を解釈・評釈したり、文学上の理論や著名な作品・作者の特徴などについて論述するといった出題がほとんどである。出題傾向について言えば、以前からのそれと大きな違いは無いと言えよう。

次に、出題の対象となっている作品や作者について見よう。まず、『源氏物語』を中心に、『古事記』『枕草子』『日本永代蔵』『奥の細道』といった、日本文学史上著名な、あるいは基本的とも言うべき、古典作品が解釈問題の素材として取り上げられていたことが知られる。また、教案作成の対象とされている作品は『徒然草』（21）「教授法」、以下、特定の年度や試験科目を示す場合、アラビア数字で出題された年度、「」内に試験科目名を記す）であり、解釈問題と同様の傾向にあることは疑いない。さらに、論述や解説を要求する問題においても、『万葉集』、世阿弥などの謡曲関連事項、尾崎紅葉と幸田露伴（21）「文学史」、柿本人麻呂（22）「国文解釈」、西行と藤原定家（23）「国語」といった、これまた日本文学史上、あるいは日本芸能史上重要な作品・事項・人物らが取り上げられていた

ことが知られる。こうした著名かつ基本的な古典作品・作者が問題として取り上げられるという点も、この時期以前からの一貫した傾向と言える。⁹⁾

「国語」という科目自体の性格にもよるのであるが、右に述べたような傾向を踏まえるならば、樟蔭女専では基本的な古典作品や作者などに関わる知識の獲得とそれら作品の読解を中心とした授業が、敗戦の前後で大きく変化することなく行われていたと推定することができる。ただ若干興味を引くのは、昭和三三年度に「謡曲」(勝俣億朗先生担当)という科目が設けられている点である。樟蔭女専ではそれまでも謡曲や能楽に関わる問題が出題されているが、わざわざ「謡曲」なる科目が設けられるような状況は、果たして他校においても同様に見出せるのであろうか。もし樟蔭女専でのみ確認される点であるとするならば、その特色として改めて注目すべきであろう。この点については今後追究すべき課題として、ここで特に記しておきたい。

ところで、論述が主となる「文学概論」「国語学」といった科目について見ると、「文学概論」では、①悲劇と喜劇(21・23)、②詩と戯曲・小説(22)、詩と散文(23)との差異が問題とされている。一方、「国語学(概説)」では、①仮名(21・22)、②文字の起原と発達(22)、③日本の文学(23)について出題されている。いずれも文学理論の基礎、言語学や日本語の根幹に関わる問題が取り上げられていると言ってよいであろう。両科目とも、昭和二十一年、新たに着任された安田章生先生によって担当された科目である。この両

科目に注目すると、「文学概論」についてはそれほどでもないが、「国語学」については、特に太平洋戦争中に出版された問題とは一線を画しているように見える。

戦前「国語学」は、昭和九年度から新町徳之先生が担当されていたが、その時期の問題は、おおよそ大問二問で構成されていた。そのうち一問が本居宣長や東條義門に代表される国文学系の国語研究に関する問題であり、もう一問が日本語の音韻やアクセントに関する言語学的な問題という出題傾向が確認される。そうした中で、昭和一六(一九四一)年の日米開戦後になると、国文学系の問題が残る一方で、「世界の言語における日本語の地位」について論述することが求められたり(16)、「大東亜共栄圏域に於ける諸言語を略述し、それらの諸言語における国語の地位を論定せよ」(18)といった、戦争の展開を反映した問題が出題されている。戦争の影響を受けたと考えられるそうした問題が消えたことに、改めて「戦後」を確認することができるとも言えよう。

なお、本稿ではじめて出題対象(作品)まで翻刻・紹介した「漢文」についてであるが、その問題には、「国語」と同様、基本的な作品の読解を中心とした出題であったと言える。この時期以前の問題でどのような作品が取り上げられていたか、あるいは科目担当者(出題者)の交代による出題傾向の差異といった詳細は今後確認しなければならないが、出題傾向については言えば、大きな変化は見られないように思われる。

むすびにかえて

以上、昭和二一―二三年度の中等教員「国語」免許関係の試験問題をみてきた。当該期の樟蔭女専の「国語」教育においても、第二次世界大戦敗戦までの時期と同様に、古典作品を中心として、それらに関わる豊富な知識とそれに裏付けられた解釈の能力を身につけることが目指されていたことが確認されたと言えよう。

ところで、作家田辺聖子氏は、昭和二二年三月に樟蔭女専を卒業されており、本稿で翻刻・紹介した昭和二一年度の試験問題をまさに受験されたことになる。我々は田辺氏の女専時代の成績を知るることができるが、それによれば第三学年後期、「国語及び国文学」のうち、第一講読九三点、第二講読九七点、第三講読九五点、文学概論・文学史九八点、また「漢文」では第一講読九五点、第二講読九八点と、どれも満点に近い高得点である。今回紹介した「国語」や「漢文」の試験問題がそれぞれどの講読に該当するかは不明であるが、いずれにしても表に示した問題をほぼ完璧に解答しなければ、こうした高得点を獲得することはできない。田辺氏は学科中の首席であり特別と見なすこともできようが、こうした試験に合格点を獲得して行くには、古典作品の精緻な解読、与えられたテーマについての論述を果たして行かねばならず、田辺氏に限らず当時の女専生に相当高い学力が求められていたことは間違いないところである。

中等教員「国語」免許の無試験制度が許可された学校の試験問題に関しては、「問題として採られる文章や設問のレベルとしては、

現在行われている大学入試の「古典」問題よりやや上、といった程度と見られる（すべて記述式で問われていることを勘案すれば、これを受験するハイ・ティーンの学生たちが感じる負担は大学受験生のそれを大きく上回るものであろう¹⁵）」との評価が示されている。国語教育について門外漢の筆者から見ても、現在の大学受験生とほぼ同年代の生徒が受験する試験、しかも中等教員免許が取得できる

かどうかという資格取得上重大な意味を持つ試験として考えると、その負担の大きさを感じずにはいられない。さらに、先の引用にも指摘されていたように、現在多くの試験で採用されている選択式・択一式とは異なり、すべて記述、あるいは論述しなければならないという点に着目するならば、やはり試験のために相当な準備、勉強が必要となったものと推測する。

改めて、当時の樟蔭女専生の高い学力を再認識するとともに、それを獲得するためにはらわれた努力に対して敬意を表しつつ、擱筆する。

〔付記〕 本稿は、二〇〇三―二〇二二年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成費による成果の一部である。

〔注〕

（1）昭和一九年一月に実施された「女子専門学校教育刷新」に基づき、樟蔭女専でも「国文科」から「文科国語科」に改められた。これは全国一律の措置であった。昭和一九年四月に入学し

た生徒が卒業を迎えるのが、昭和二年三月ということになる。

- (2) 昭和二年四月一八日『官報』第六〇七六号により、他校と同様に「国民科国語」免許に改められた。

- (3) 拙稿「十五年戦争期の女子専門学校国語試験問題」(大阪樟蔭女子大学論集』第四六号、二〇〇九年)。

- (4) 白川・本間悦江・宮本愛美・吉田みなみ「樟蔭女子専門学校国文科『国語』試験問題の翻刻と紹介(1)」(『樟蔭国文学』四七号、二〇一〇年)。

- (5) 樟蔭女専も昭和二四年四月、樟蔭女子専門学校から四年制の大阪樟蔭女子大学(新制大学)へと昇格した。

- (6) 前掲注(3)参照。

- (7) 「国民科国語」への科目統合の問題については、船寄俊雄／無試験検定研究会編『近代日本中等教員養成に果たした私学の役割に関する歴史的研究』(学文社、二〇〇五年)第2章第4節「国語科の場合」(岩田康之氏執筆)参照。また同書には、各学校の教員免許の科目が変更された昭和二年四月一八日付官報の記事も収載されているが、その中に樟蔭女専の項目前掲注(2)が確認される(同書四〇七ページ)。

- (8) 樟蔭学園に遺る資料によれば、昭和二〇年度中に何名かの教員が死去したことが知られる。こうした教科担当者の問題も含めて、どのような形で試験が実施されたのか、現段階では問題内容以外については確定できない。

- (9) 前掲注(4)参照。

- (10) 本稿で紹介した時期だけに限っても、勝俣億朗先生が担当した21「国語科」、22「国文学史」において、出題が確認される(表「出典等」欄に「謡曲」と注記)。加えて昭和一九年度以前にも目を向けると、15・16・18・19「国語」における出題が確認される。

- (11) 前掲注(3)掲載の「表 検定試験問題(国文科)一覽」参照。

- (12) 前掲注(3)参照。

- (13) 前掲注(3)掲載の「表 検定試験問題(国文科)一覽」に示したように、樟蔭女専の「漢文」は昭和三〇九(一九三四)年度までは主に山口助治先生、翌昭和一〇(一九三五)年度から同二〇年度は大江文城先生によって担当されていた。そして本稿で示したように昭和二一年度からは関矢道雄先生に交代している。

- (14) 浦西和彦『田辺聖子書誌』(和泉書院、一九九五年)所載「田辺聖子年譜」四七四〜四七五ページ。

- (15) 前掲注(7)書一四一ページ。

年度	科目名	時間(分)	担当者	問 題 内 容	出典等	備 考
昭和23年度／昭和24年	漢文	90	関谷(矢カ)道雄	一、左ノ詩ニ訓点ヲツケ且ツ「 」ノ部分ヲ解釈シナサイ 望夷宮中鹿為馬、秦人半死長城下、避時不独商山翁、亦有桃源種桃者、此成種桃經幾春、掠花食実枝為薪、是孫生長與世隔、雖有父子無君臣、「漁郎滌迷遠近、花間相見因相向、世上那知有秦、山中豈料今為晋、問道長安吹戰塵、春風回首霏中、重華一去寧復得、天下紛紛幾幾秦」	王安石「桃源行」	
				一、次ノ詩ヲ評釈シナサイ 莫笑農家臘酒渾、豐年留客足鷄豚、山重水複疑無路、柳暗花明又一村(村カ)、簫鼓追隨春社近、衣冠簡朴古風存、從今若許閑乘月、拄杖無時夜扣(叩カ)門	陸游「遊山西村」	
	謡曲	90	勝俣億朗	一、「松風」の狂乱物的の變物であるといふその理由について説明しなさい 一、大小の序の舞物と太鼓の序の舞物とを例を挙げて比較しなさい		
	国語	90	宇佐美喜三八	左の文を解釈せよ (一) 二条の院よりぞ あながちにあやしき姿にて そぼち参れる、道かひにてだに 人か何ぞとも御覧じわくべくもあらず、まづ追ひ払ひつべき臆の男のあはれに睦まじう思さるも 我れながら辱しく屈しにける心のほど 思ひ知らる	『源氏物語』明石	
				(二) 年頃夢に中にも見奉らで 恋しう覚束なき御様をほのかなれど さだかに見奉りつるのみ面影に覚え給ひて わがかく悲しみを極め命尽きなむとしつるを 助けにかけり給へると あはれに思すに よくぞかかる騒ぎもありけると 名残頼もしう嬉しとおぼえ給ふこと限りなし		
	国語	90	小林文助	左の文を精釈せよ 1、楽天は五臓の神をやぶり、老柱は瘦せたり、賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずや と思ひすてゝふしぬ 先づたのむ 椎の木も有り 夏木立	『奥の細道』	
2、なんでふことなき人の すゝろにえがちに物いたうひたる 3、九品蓮臺の間には下品といふとも 4、遠くて近きもの極楽、船の道 5、少納言よ香炉峰の雪はいかならん				『枕草子』		

注 本表では、国文科を対象に実施された科目を示した。したがって、中等教員「国語」免許に直接関わりがないと判断される科目をも含んでいる。

年度	科目名	時間(分)	担当者	問 題 内 容	出 典 等	備 考
昭和22年度／昭和23年	漢文講釈	80	関 矢 道 雄	昔者鄭武公欲伐胡、故先以其女妻胡君、以娛其意、因問於群臣、吾欲用兵、誰可伐者、大夫闕其思對曰、胡可以代(伐カ)、武公怒而戮之曰、胡兄弟之國也、子言代(伐カ)之、何也、胡君聞之、以鄭為親己、遂不備鄭、鄭人襲胡取之、「宋有富人、天而(天雨カ)牆壞、其子曰、不築必將有盜、其隣人之父亦云、暮而果大亡其財、其家甚智其子、而疑隣人之父」、此二人説者皆当矣、厚者為戮、薄者見疑、則非知之難也、処知則難也、 一、「」の部分に訓点を施す 一、此二人とは誰をさすか 一、厚者とは誰か、薄者とは誰か 一、文の趣意を二行以内に述べよ	韓非子 『説難』	
	家庭経済	80	田村米三郎	経済的生活に於ける規則正しい生産の意義を論じなさい		各科共通カ
	国語	80	勝俣 億 朗	一、枕草子が国文学に於ける古典として尊重せらるゝ理由	『枕草子』	各科共通カ
				二、 (1)むば玉の 闇のうつつは 定かなる 夢にいくらかも まさらざりけり	『古今和歌集』647 読人しらす	
	家庭教育			右は研究物の審査(レポートによって)		各科共通カ
昭和23年度／昭和24年	倫理	90	勝俣 億 朗	一、発展という思想を中心としてライブニックの哲学及倫理観の特色を略述しなさい 二、家庭の理想的なすがたについて意見を述べなさい		
	国語	90	安 田 章 生	一、西行と定家の歌 各一首を挙げて評釈しなさい	西行・藤原定家	
	国語学	90	安 田 章 生	一、日本の文学について述べなさい		
	文学概論	90	安 田 章 生	一、喜劇精神と悲劇精神		
				二、詩精神と散文精神		
	漢文	90	関谷(矢カ)道 雄	一、次の文(読)訓点ヲツケ且ツ設問ニ答ヘナサイ 子曰、親(視カ)其所以、觀其所由、察其所安、人焉、廋哉、人焉、廋哉 以為也、由從也、或曰、由行也、安樂也、為善者為君子、為惡者為小人、事雖為善、而意之所從來者、有未善焉、則亦不得為君子矣。所由雖善、而心之所樂者、不在於是、則亦偽耳、豈能久而不變哉 設問 此ノ章ハ如何ナルコトニツイテ述ヘタコトカ(簡明ニ)	『論語』 為政10 朱熹の註	

年度	科目名	時間(分)	担当者	問 題 内 容	出典等	備 考
昭和22年度／昭和23年	修身	80	勝俣億朗	一、デカルトの近世哲学上に於ける地位について略述しなさい 二、左について述べる 1、属性 2、形而上学的自由		各科共通
	教育	80	山田在夫	一、遺伝と教育との関係 二、訓練の目的		各科共通
	国文解釈	80	小林文助	左の文の語句を精釈しなさい 一、 時分からの御無心なれとも、身にかへてもいとほしさのまゝ、春切米を借越し、送付け参らせ候、此内二匁はいつぞやの諸分その残り皆全身、年々つもりし借銭を済まし申さるべし、愼して人は其分限相応のおもはくあり、大阪屋の野風殿に西国の大臣菊の節句仕舞にとて一步三石おくられしも、我らが一再心入は同じ事ぞかし、有れは何か惜しかるべし イ、当時(元禄)銀相場の名目 ロ、舊里と切る ハ、楠木分限 ニ、若えびす 二、永代蔵をよみて感想を述べよ／全体的、部分的何れにてもよろし	『日本永代蔵』巻一	
	国語学	80	安田章生	一、仮名文字について知れる所を述べなさい 二、文字の起源及び発達について簡単に述べなさい		
	国文解釈	80	安田章生	一、人麿の歌一首を挙げて評釈しなさい	柿本人麿	
	文学概論	80	安田章生	詩、戯曲、小説の特質を比較論評しなさい		
	国文学史	80	勝俣億朗	芸能人としての犬王と観阿弥とを比較対照しなさい	謡曲	
	漢文支那文学史	80	関矢道雄	一、支那文学の特色 二、詩経と楚辞とを比較せよ 三、支那南方文学と北方文学を比較しなさい 四、唐時代の詩人五人を挙げさなさい 右の内二題を選んで答へよ		
	漢文講釈	80	関矢道雄	夫虎之所以能服狗者、爪牙也、使虎积其爪牙而使狗用之、則虎反服於狗矣、人主者、以刑德制臣也、今君人者、釋其刑典而使臣用之、則君反制於臣矣、故田常「上請爵禄而行之群臣、下大斗斛而施於百姓」、此簡公失德而田常用之也、故簡公見弑、子罕謂、宋君曰、大慶賞賜予者、臣之所喜也、君自行之、殺戮刑罰者、民之所要(悪カ)也、臣請當之、於是宋君失刑、而子罕用之、故宋君見劫、田常徒用德而簡公弑、子罕徒用刑而宋君劫・・・ 右の文に訓点を施し、且つ左に答へよ 1、要旨を二行以内に述べよ 2、虎の例話は如何なる趣旨を述べたか 3、子罕の例話は如何なる趣旨か 4、「 」の部分解釈せよ	韓非子「二柄」第七	

年度	科目名	時間(分)	担当者	問 題 内 容	出 典 等	備 考	
昭和21年度	文学史		細川 馨	一、紅葉と露伴との文学を比較評論せよ	尾崎紅葉・幸田露伴		
	西洋史		千葉政清	ギリシャ、ローマの政治史を通観して共通な事象を挙げ之を簡単に説明しなさい			
	日本史		千葉政清	原初国家発生までの古代日本			
	教授法		細川 馨	「折ふしのうつり変るこそ ものごとにあはれなれ…」徒然草 の課を高等女学校四年生に教授する教案を作製せよ(第一時限)			
	漢文科			関 矢 道 雄	論語 一、左文ニ訓点ヲ施シ且詮ニヨリ解釈セヨ 尚(1)ニ就テハ古詮ニヨリソノ異ナル点ヲ明瞭ニセヨ 1、子夏問孝、子曰、色難、有事、弟子服其勞、有酒食、先生饌、曾是以為孝乎 註 色難、謂事親之際、惟色為難也、食飯也、先生父兄也、饌飲食之也、曾猶嘗也、有愉色者必有婉容、故事親之際、惟色為難耳、服勞奉養、未足為孝也、旧說承順父母之色為難、亦通、程子曰、子夏能直義、而或少溫潤、同材之所矣、而告之	『論語』 為政第二 (8) 朱熹の注	
					2、子曰、見賢思齊焉、見不賢而内自省也 註 胡氏曰、見人之善惡不同、而無不反諸身者、則不徒羨人而甘自棄、不徒責人而忘自責矣	『論語』 里仁第四 (17) 朱熹の注	
					詩 一、左ノ詩ノ中何レカラーツ選ヒ訓点ヲ施シ「」ノ部分ヲ解釈セヨ 1、我從去年辭帝京、謫居臥病潯陽城、潯陽地僻無音樂、終歲不聞絲竹聲、住近湓江地低濕、黃蘆苦竹遶宅生、其間旦暮聞何物、杜鰲啼血猿哀鳴、「春花朝秋月夜、往々取酒還獨傾、豈無山歌與村笛、嘔啞嘲哢難為聽、今夜聞君琵琶語、如聽仙樂耳暫明、莫辭更座彈一曲、為君翻作琵琶行」	白居易 「琵琶行」	
					二、浩々歌、天地万物如吾何、屈原枉死汨羅水、夷齊空餓西山坡、丈夫拳拳不可羈、何用自滅磨、「吾觀聖賢心、自樂豈有他、蒼生如命窮、吾道成蹉跎、直須為弔天下人、何必嫌傷傷丘軻」	馬子才 「浩浩歌」	
左ノ文ニ送り仮名ヲ施シ且ツ解釈セヨ 伊尹為宰、百里矣為虜、皆所以干其上也、此二人者皆聖人、然猶不能無役可以進、如此其汚也、今以吾言為宰虜、而可以用而振世、此非能士之所恥也					韓非子 「說難」第十二		
左ノ文ヲ仮名交リノ国文に改作セヨ 從今天■不論政府人民、都要從「除旧布新」四個字成努力、而日要共同一致、日新又日新的來努力、我們現在轉要實行憲政、人民憂國家的主体、今從國家的機運、完全繫施今回…	出典不明						

年度	科目名	時間 (分)	担当者	問 題 内 容	出典等	備 考
昭和21年度	道義科 (修身科)		勝俣億朗	人間の解釈につきソフィストとソクラテスとの相違を明かにしなさい		各科共通
	教育科		山田在夫	我が国教育の目的を論じなさい		同上カ
	国語科		上原延蔵	一、解釈及短評 よろづの事昔には劣りざまに浅くなり行く世の末なれど 假字のみなむ今の世はいと際なくなりたるふるき跡は定まれるやうにはあれど ひろき心ゆたかならず 一筋に通ひてなむありける 妙にをかしきことは外よりこそ書き出づる人々ありけれど 女手を心に入れて習ひしきかりに こともなき手本多く集へたりし中に 中宮の母御息所の心にも入れず走り書き給へりし一くたりばかり わざとならぬを得て際ことに覚えしはや	『源氏物語』梅枝	
				二、全 若宮 まろがさかりはさきにけり いかで久しく散らさじ 木のめくりにて几帳を立て、帷子をあげずは風もえ吹きよらし とかしこう思ひ得たりと思ひて宣ふ 顔のいと美しきにも(う脱力)ち笑まれ給ひぬ 覆ふばかりの袖求めむ人よりは いと賢う思しより給へりかしなと 宮はかりを翫ひに見奉り給ふ	『源氏物語』幻	
	国語科		小林文助	一、左の歌を精釈しなさい このかにや いくつかのかに ももづたふ つぬがのかに よこさらふ いづくにいたる いちしまし みしまにとき みほどりの かづきいきつき しなたゆふ さゝなみちを すくゝと わがいませばや こはだのみちに あはししをとめ うしろでは をだてろかも はなみはしひじなす いちひみの わにさのにを はつには はだあきらりみ しはたには にぐるき故ゆゑ みつくりの そのなかつにを かぶつく まひにはあてず まよがき こにさきたれ あはしゝをみな かもがとわがみしこら かくもがと あがみしこに うたげだに むかひをるかも いそひをるかも	『古事記』中卷応神天皇記	
	国語科		勝俣億朗	一、萬葉集の歌一首を挙げて評釈し、萬葉歌風の特徴にも触れて説明しなさい	『万葉集』	
				二、左に就いて説明しなさい 1、世阿弥の所謂「本説」或は「種」 2、神舞物	謡曲	
	国語科		中村福次郎	左の作品の内、どれか一つに付て批評或は感想を書きなさい 一、シェリーの雲雀の詩 二、シェリーの雪の詩 三、キーツの夜鶯の詩		
	文学概論 ／国語学 概説		安田章生	次の説明をしなさい 一、悲劇と喜劇について 二、仮名について		

表 樟蔭女子専門学校国文科「国語」検定試験問題
(昭和20(1945)年度～昭和23(1948)年度)

年度	科目名	時間(分)	担当者	問 題 内 容	出 典 等	備 考
昭和20年度	倫理	60	伊賀駒吉郎	一、ヘレニズム ト ヒブレイズム 二、産業革命ノ起リト其ノ結果		本科全部
	国語	60	上原延蔵	一、(現代語訳カ) 須磨にはいとゝ心づくしの秋風に海は少し遠けれど行平の中納言の関吹き越ゆると言ひけむ浦波夜々はげにいと近く聞こえてまたなくあはれるものはかかる所の秋なりけり 御前にいと人ずくなにと皆うちやすみ渡れるにひとり目をさまし給ひて枕をそばだてし四方の嵐を聞き給ふに波々はこゝもとに立ちくる心地して涙落つとも覚えぬに枕浮くはかりになりけり、琴をすこし掻きならし給へるが我ながらすごう聞ゆれば弾きさし給ひぬ	『源氏物語』須磨	
				二、萬葉集の代表的歌人二名をあげて比較しつゝその特異性を述べよ	『万葉集』	
				三、次の枕言葉を説明せよ イ、つがの木の ロ、奥の藻の ハ、あをによし		
	漢文	60	大江文城	一、荀子ノ性悪篇中の「人之性悪明矣其善者偽也」トノ語句ヲ解ケ		
				二、老子ノ所謂「善者吾善之不善者吾亦善之徳善」ノ意味ヲ解ケ		
	国語	60	小林文助	一、左の文に仮名ヲ附ケ傍線の句を精訳し全文を解釈すべし 天の高山の百(五カ)百津眞賢木を根こしにこじ上つ枝には(八カ)尺の勾璫の五百津の御須麻流の玉を取り着け中の枝には(八カ)尺の鏡を取りかけ下枝には白丹寸手青丹寸手を取り挙げて、この種々の物は布刀玉命、布刀御幣を取り持たし、天児屋根命布刀詔戸言禱き白して、天手力男神、戸の横に陰り立たして、天宇恒賣命、天の香山の天の影を手次に繋けて、天の眞析を縷と璫して、天香山の小竹葉を手草に結びて、天の石屋戸に誓槽伏せて踏みをとろこし、神懸りて胸乳を掛き出じ裳緒を押し垂れき、かれ高天原動りて八百萬の神共に咲ひき 1、八尺の勾璫の五百津の御須麻流の玉 2、白丹寸手 3、布刀御幣 4、天の眞析を縷 5、神懸	『古事記』上巻「天の岩屋」	傍線の語句カ
				二、天神七代、地神五代の御神名を書け		
	文学史	60	細川 馨	一、例ヲ経国美談ニトリ政治小説ノ本質ヲ略述セヨ	『経国美談』	
	歴史	?	山本荒吉	一、文芸復興ノ意義		
	文学概論	60	新町徳之	一、創作と批評との関係		
	国語学	60	細川 馨	一、本居宣長ノ国語法研究の価値		
法制	60	中森作太郎	一、司法権の独立		家政科と共通	
			二、緊急勅令			

